

4月例会のお知らせ

はやいもので3月の声を聞き、佐賀大でもカチガラスが懸命に巣作りをしています。さて、年次計画に従って、本年度第一回の研究会を下記により開催いたします。大勢のご参加をお待ちしております。

日時：4月14日（日）15：00～17：00

場所：佐賀大学附属図書館4階大会議室

（正門からより南バイパスからのほうが近いです。）

報告者

1) 15：00～15：50

小澤健志「佐賀藩所有のオランダ語の医学書について」

小澤会員の報告は、好生館所蔵のオランダ医学書を原本がそれぞれ何であったかを突き止めた労作です。こんなにも多くのオランダ医学書が佐賀藩好生館に入っていて、西洋医学研修に使われていたのかということが改めて驚きをもってお聞きできると思います。

2) 15：50～16：40

鍵山稔明「佐賀の薬学史について（仮）」

『佐賀県薬剤師会史』をお書きになった鍵山会員により、薬学概史のなかで佐賀に関係するところを中心にお話しいただけます。医学と薬学がどのように関わり、生まれ成長してきたかが、お話しをお聞きするとよくわかるでしょう。

3) 16：40～17：00

会員近況報告。いろいろ近況をご報告ください。



佐賀医学史話

緒方春朔の人痘法と門人たち

天然痘の予防法・人痘法 天然痘は、罹患すれば死亡率の高い感染症であった。しかし、一度罹り治癒すると二度と罹らないという、他とは異なる性質をもった不思議な病気でもあった。だから、経験的に天然痘に罹った人の膿や痂を、罹患していない人に感染させて免疫を得ようとする方法が始まった。これを人痘法という。

清の医学書『御纂醫宗金鑑』（乾隆七・一七四二刊、以下『医宗金鑑』または『金鑑』）に中国式人痘法が紹介されている。それによると①水苗種法、②旱苗種法、③痘衣種法、④痘漿種法の順に四法があり、そのうち、③痘衣種法は、痘児の衣服を未痘の児に着せて感染させようとする法、④痘漿種法は、痘児の痘漿を棉布で拭って男は左、女は右の鼻孔に入れて塞ぎ感染させる法で、この二つは真の天然痘に罹る危険性が極めて高いので、ほとんど実施されなかった。

① 水苗種法は、柳木で作った杵で痘痂を粉末にして水に溶かしてこれを未痘児の鼻



孔に垂らし入れる法である。②早苗種法は、痘痂を五、六寸の頸の曲がった銀管で粉末にして、男は左、女は右の鼻孔内へ吹き込む方法であり、この方法が最も用いられた。①、②は痘痂を使用していること、①、②、④は鼻へ痘苗を入れる方法であることが共通の特徴である。

人痘法にはインド起源もあり、針尖で前膊・上膊部の皮膚を擦過した浅い傷に痘漿を吸収させた小塊を貼り、包帯や布で固定し感染させる方法で、トルコに渡り、痘痂を点苗するトルコ式人痘針刺接種法が生まれ、これが一八世紀前半にはイギリスやフランスなどヨーロッパに広がった。

日本へは中国式人痘法が伝来した。延享二年（一七四五）、中国商船に乗って来日した杭州府種痘科医師李仁山が、長崎町医柳隆元、真野駿庵、堀江道元、榎林栄蔵の四人に人痘種痘法を伝授したという。『医宗金鑑』は日本へは宝暦三年（一七五三）ごろに伝来した。

緒方春朔の改良人痘法 『医宗金鑑』による中国式人痘法を知った秋月藩医緒方春朔惟章（一七四八～一八一〇）は、寛政元年（一七八九）に初めて秋月藩内の農民の子どもたちに早苗種法で接種し成功させた。春朔は、著書『種痘必順弁』で

早苗ハ痘痂屑を碾末シ、銀管中ニ盛り鼻孔中ニ吹入ス、此法脱落ノ患無ク応驗モ又速ニシテ捷徑ナリト雖モ一時ニ吹入スル時ハ、迅烈堪難流涕数出、或ハ嚏リテ苗氣脱泄シテ終ニ不応ニ至ル故、予ハ別ニ一方ヲ作意シテ、是ヲ用ユルニ、百発百中、一モ応セザルハ無シ。と述べている。



春朔によれば、従来の早苗種法は、痘痂屑をすり粉末にして、銀管で鼻孔中に吹き入れる方法で、すぐに反応があるのだが、一時に吹き入れると失敗するので、春朔が方法を改良したら、百発百中で効果があったと述べている。では、春朔の改良した早苗種法とはどのようなものか。

春朔の孫の緒方春朔惟馨が天保一一年に改めた『種痘緊轄』（以下『緊轄』）に春朔が工夫した早苗種法が載っている。製苗は『金鑑』に「柳木作杵碾為細末以」とあり、春朔も「末ニスルニハ柳木ノ杵ヲ用ユ」（『緊轄』）と述べているので、痘痂を柳木の杵で碾^すって粉末にすることは同じである。

下苗（種痘）の分量を工夫している。『金鑑』には、痘痂（痘痂の粉）の分量の記載はみえないが、春朔はその分量を「初生ヨリ四、五才ノ児ハ痂屑三厘ヨリ五厘ニ至テ良シ、十才以上ノ者ト雖モ一分ヲ過サス」（『緊轄』）と記し、初生から四、五歳の子は痂屑が三厘から五厘（約一〇〇～二〇〇mg）、一〇歳以上でも一分（約四〇〇mg）を超えてはいけないと詳細に規定しているのが特徴であり、実践的であった。



下苗の方法について、『金鑑』の早苗種法は、銀管の端に極細の痘末を詰め、男は左、女は右の鼻孔に吹き入れる方法であったが、春朔は、「曲管カ柳篋ヲ用ヒ少シツツ痘痂ヲスクイノセ呼吸ヲヨリ考ヘ男ハ左、女ハ右ノ鼻孔ニ対シ指出セハ息ニ随ッテ肺蔵ニ伝フ」（『緊轄』）と記すように、銀管か柳の篋に痘痂をすくい、鼻孔に差し出して睡眠中の呼吸で吸い込ませて肺臓へ達せさせて、反応させる方法を創案した。

春朔の人痘法は、『金鑑』の鼻へ吹き入れる方法ではなく、睡眠中の呼吸に合わせて吸い込ませる方式を工夫したのであった。

春朔の門人たち これらの成功により、春朔の人痘法は世に知られ、多くの門人が入門し、その人痘法を伝授された。春朔の門人は、富田英壽氏によれば、緒方春朔門人帳の一〇〇人及び入門誓約書二人の計一〇二人が知られる。この地域分布は肥前一四人や筑前一一人、筑後一〇人などの九州地区を中心に、京都一一人、東都（江戸）六人のほか、文化一二年には盛岡家中藍田三碩が入門しているなど全国的分布を示している。

春朔は門人のなかで、とくに技術の高い門人を28人選んで『種痘必順弁』の末尾に種痘医として紹介している。その肥前門人には、肥前唐津藩医米津玄丈、肥前本町平川玄龍、肥前養父郡田城春水、肥前養父郡飯田高尾東陽、肥前瓜生野駅原泰民などがいて、彼らは春朔式人痘法を肥前の人々に伝えた。

大村藩の種痘 大村藩医の長与俊民も、春朔にこの人痘法を学んだ一人である。門人帳には寛政九年（一七九七）に大村藩侍医長与俊民、針尾石庵、稲吉正立の三人が連れ立って入門したように記されている。三人の藩医が同時期に入門したのは、おそらく藩命によるものであろう。

俊民は大村藩に戻り、その子長与俊達とともに春朔式人痘法を領内に実施した。大村藩は、文政一三年（一八三〇）、「種痘之義御領内格別重宝之業柄に候 依て其方儀痘家被仰付候様條、後年に至迄類転無之様可相心得候 文政十三年寅正月廿二日 長与俊達江」（『大村藩の医学』）と、俊達を痘家に命じて、藩内に古田山種痘所という接種所において、領内の八歳から一六歳ぐらいまでの子ども達を集めて人痘接種を行わせることとした。その方法は、俊達の孫で明治七年（一八七四）に文部省医務局長にもなった長与専斎の語るところによれば、「（古田山へ）登山後一、二日の後再び診察を遂げ、感冒・発熱等の患なきを認め（中略）、かねて貯へ置きたる痘痂の粉末を小^{（きじ）}七に盛り、鼻より吸い込みしむること、二、三匙にして止むなり」（「旧大村藩種痘の話」）というもので、緒方春朔の鼻吸入式人痘種法そのものであった。このように牛痘法伝播の前に春朔式人痘法がかなり普及していた。じつは人痘法にもう一つあり、それも意外と普及していたことは次号でお話します。

緒方春朔門人種痘医

肥前唐津藩 米津玄丈	肥前本町 平川玄龍	肥前養父郡 田城春水	肥前養父郡 飯田高尾東陽	肥前瓜生野 駅原泰民	京都 一一人	東都（江戸） 六人	盛岡 藍田三碩
---------------	--------------	---------------	-----------------	---------------	-----------	--------------	------------



編集後記

会報46号をお届けします。すっかり春めいた陽気になり、先に前期合格者発表があったと思えば、3月12日は後期試験です。2月2日には、古藤浩会員著『開国前夜の佐賀藩』（書肆草茫々）再版祝賀会が開かれました。80歳を越えてなおご健筆。学びの道に年齢はないことを身を以て示されております。5月7日には新県立病院「佐賀県医療センター好生館」が開院式を迎え、同月には九州国際重粒子線ガン治療センターも開設予定です。医学寮、好生館に始まる佐賀の近代医療がさらに新段階をむかえるといえましょう。その折り、近代医学の原点ともいべき好生館の医学教育や佐賀の薬学史の研究報告は意義深いものがあります。ぜひ佐賀大図書館へ、ご参集ください。